

11. 沖縄県読谷村の慰霊碑調査

馬籠 翔

京都府立大学文学部歴史学科3・4回生向け開講科目「地理学実習」、および大学院生科目「地理学演習」では、沖縄県内の市町村から任意の自治体を選択したうえで、当該自治体の現地調査を実施することが例年の慣行であった。今年度は、新型コロナウイルス感染症が流行する以前に実施した2019年度以来、3年ぶりの調査となった。本調査の実施に際しては、例年5泊6日であった調査期間を3泊4日へと縮小し、さらに個人調査をグループワークに変更するなどの措置をとった。

1. 今年度の調査概要

例年調査地は相談のうえで3回生が決定していた。今年度は、2020年度の調査予定地であった沖縄本島中部の読谷村を調査地とした。調査概要は以下の通りである。

調査日：令和4年6月28日から7月1日

調査地：読谷村

調査員：上杉和央・川瀬貴也（教員）、奥谷美穂（共同研究員）、岩本悠梨・上田龍摩・永田秀悟・西真歩・廣澤俊祐（3回生）、青柳隆慈・永久陽菜・幸川玲・高橋日向・前田愛佳（4回生）、馬籠翔（修士1回生）

読谷村は沖縄本島中部に位置し、2020年現在日本国内で最も人口の多い村である（令和2年国勢調査）。沖縄戦では、東シナ海に面する西側の海岸一帯が米軍の上陸地点となったことで知られ、戦後は村域の9割強が米軍に接収された。

今年度の調査では、主として読谷村内に現存する沖縄戦に係る慰霊碑の調査と、慰霊碑が設置されている字（あざ）の自治会長へのヒアリング調査を実施した。調査の実施にあたっては、学生・院生の参加者11名を3班にわけ、数がおおよそ均等になるように調査担当の慰霊碑を各班に配当した。

本調査の実施に際し、読谷村教育委員会文化振興課課長である上地克哉氏と、各字の自治会長の方々には大変お世話になりました。末尾ながら感謝を申し上げます。なお、本調査の成果は『2022年度地理学実習調査報告書 読谷村』として刊行の予定である。



図1 測量調査の様子

編集後記

フィールド集報は、刊行当初より Adobe 社の InDesign を利用して組版作業を手作りでおこなっている。InDesign の取り扱いは、歴史学科文化遺産学コースのうち、考古・建築・地理の実習メニューに含まれ、本書の一部については、そうした実習のなかで学生が組んだものとなっている。

今年度のフィールド調査においても、各地で多くの方からのご理解とご協力を賜った。ここに改めてお礼申し上げる。歴史や文化遺産にかかる調査は一人では決して成しえないということを、今後も常に意識するように努めたい。(う)

京都府立大学文学部歴史学科

フィールド調査集報 第9号

編集・発行 京都府立大学文学部歴史学科

〒606-8522 京都市左京区下鴨半木町 1-5

発行日 2023年3月30日

印刷 株式会社 北斗プリント社

〒606-8540 京都市左京区下鴨高木町 38-2
